

車池

たつの市揖西町

山がのけぞるほどに、風がうなる。大粒の雨が雑巾をたたきつけるように屋根を、板戸をうつ。大雨は休む間もなく降り続け新宮（たつの市揖西町）の村を水びたしにした。それぞれの家で、息をこらして魔の通り過ぎる刻を待っていた村人たちは、耐えかねて家を出た。

鎮守の森へ行こう。行けば誰かがいる。誰が誘ったのでもない。思いは同じで、みんな

が小高い森に集まった。全身ぬれねずみの村びとたちの、どの顔もひきつっている。このままでは家も田畑も、村が流される、という切羽詰った焦りが、口を重くしていた。が、どうする術もないと分かっていても、沈黙に耐えることは難しい。

「これは、普通の嵐とちがうで」

「そや、池の主が怒っとんじゃ。あのうわばみ（大蛇）は、うろこ一枚に一斗の水を持つとるそうな」

「なんでも、空を呼んで竜巻を起こすともいうでのお」

「と、いうと……」

みんな、ギクツとして視線を宙に浮かせた。

池の主の怒りを解くには村の娘を一人、いけにえにしなければならぬ、という言い伝えがある。

一体、だれの娘を……。もしやわが子が、と思うだけでも身ぶるいする。娘を持たぬ人は、目を伏せて土砂降りの外へ出て行った。娘を持つ親は、雨風も感じぬ土偶のように、重い足どりで娘を連れに帰った。ことは急を要する。娘を伴った父親が、鎮守の森へ引き返したのは、それから小半刻のあとだった。が、わが娘をうわばみのヨメに、などと思ひ定めた人は、一人もない。晴れた昼間でさえ、大人も通るのをためらう薄暗がりの大地の、それもあるうことが大蛇に娘をさし出す

など、なんと理不尽な。

一言でも、ものをいえば、わが娘に目が集まる。だから親は、おびえふるえる娘を背にかばいながら、ひたすら押し黙った。その間も、谷あいから吐き出される水の、ごうごうと地響き立てる音は高まるばかり。うずくまる親と子には、よけい大きく聞こえる。だれしもわが子はかわいい。他人の娘を指名せぬ限り、口を開けばわが子をさし出すほかない。だんまり比べで心臓も氷る。その時、「わたしでよかったら、大地の……。」か細い少女の声がした。傍らで、村で一番貧乏百姓の父が、打ちひしがれ、体をふるわせている。いつも下積みで犠牲になること

に慣らされた実直な男の、身を引き裂く決断である。

自ら進んで人身御供になろうと申出た美少女に、今は村全体がひれ伏すしかない。同じ子を持つ親として、娘の父に何と声をかけるべきか。だが何をいってもそらぞらしくなくなる。人びとは黙って親子に両手を合わせた。せめて親子の別れを、と思うが、もう余裕がない。直ちに輿に代わる竹かごが用意され、少女を送る男たちが選ばれた、少女はあきらかめ切った表情で、かごに乗った。手には糸引き車一つ。朝から晩までカラカラとまわっていたそれを膝の上に置き、村の女たちの泣く声をあとに、揺られて旅立った。

けわしい山道は、ぬかるんでいた。降りやまぬ雨で滑りもする。やっとの思いで大池のほとりにたどり着いたかごかきの男たちは、逃げるように戻って行った。声をかければ少女のいじらしさに涙がこぼれるからでもある。

木々が激しく空をたたき、水面は海のようにうねっていた。それが、まるで飼いならされたけものように静まり、黒煙と見まがうしぶきをはね上がらせていた雨が、うそのようにやんだ。

「よく来てくれたね。さあ、こっちへおいで。わたしと行こう」
不意に男の、澄んだ声が出た。おそろおそ

顔を上げた少女の目に、りりしい若者の姿がうつった。少女は、差し出された若者の手にみちびかれ片手に糸車を抱いて、そろりと歩いた。地面なのか水面なのか、まばゆい光りのなかに、かつて少女がつむいだことのない金系、銀系が交錯し、若者の顔もかたちも、はやおぼろ。

少女は、自分の変身に気づかなかった。もうずーっと以前からそうであったように、若者に寄り添っていた。新宮の村のことも、なじんだ人びとのことも、別の世界でしかない。たった一つ、安らいで吸った乳房の感触、ごついが優しかった手の温かみが、自分の中で生きている。それが母の、父のも

のであったかどうか、彼女の記憶は定かでない。かっただけでも。



車池（たつの市揖西町新宮）

村の人たちは、けなげな少女のため、墓を作り、少女の父と母を、ことあるごとにいたわった。だが、少女がうわばみに吞まれて死んだとは、思わなかったし、思いたくなかった。その証拠に、やがて「大地の中からビーン、ビーンという声がきこえる」と、だれいうとなく語り始め、あれはきつと生まれてくる赤ん坊のために少女が糸車をくっつけているのだ、とささやき合った。そう思わずにいられなかったから。

大池を「車池」と呼ぶのは、それ以後のことだという。



車池（たつの市揖西町新宮）

